

# 接尾辞ラシイの成立

村上昭子

## 要 旨

この小論は、『史記桃源抄』を中心に一五〜一六世紀の抄物を資料に用いて、形容詞をつくる接尾辞ラシイの成立について考察し、ひだりの結論に至った。

接尾辞ラシイは、名詞の非反復形を語基とし、それに、情態言の形成にかかわるラがつき、さらに、形容詞をつくる接尾辞シイがついた、名詞 $\parallel$ ラ $\parallel$ シイから成立したと推定される。

## 一

形容詞をつくる接尾辞ラシイは、中世になって、あらたに用いられるようになったものとみられる。

接尾辞ラシイの最古の用例がどの文献にあるのかについては、未調査であるが、塚原鉄雄 $\parallel$ 神尾暢子<sup>注1</sup>氏によれば、古代における複合形容詞に、ヒトラシ・シサイラシの二語があるという。ただし、塚原 $\parallel$ 神尾氏の時期区分では、一般的に中世に入れられている院政期を、古代後期として区分しており、また、接尾辞ラシ(イ)の用例が、平安時代までさかのぼらないことを考えあわせると、接尾辞ラ

シ(イ)は、中世になってから用いられはじまったものとみてさしつかえないであろう。

さて、鎌倉時代における、接尾辞ラシ(イ)の用例としては、無住(一一二六—一三二二)の『沙石集』につきのような例がある。

①或ル乳母、姫君ヲ養ヒテ、余リニホメントテ、童ワガ養姫ハ、御美目ノウツクシク、御目ハ細クトシテ、愛ラシクオワシマス(『ツ』ヤトイフヲ……(巻一 86・8)

一五〜一六世紀の抄物にも、接尾辞ラシイの用例が散見されるのは、第三節にしめすとおりである。

形容詞をつくる接尾辞ラシイは、現代語でも用いられているわけであるが、この接尾辞ラシイの成立について、第二節以下で検討することにする。

## 二

接尾辞ラシイがどのようにして成立したかについては、左記の三つの見とおしが考えられよう。

A 推量の助動詞ラシに由来した。

B 異分析<sup>注2</sup>の結果、接尾辞ラシイが成立した。

C名詞にラがつき、それに形容詞をつくる接尾辞ラシイがついたものから成立した。

まず、Aの見とおしから検討していこう。

接尾辞ラシイの成立については、これまでほとんど言及されていないようであるが、ただ、『岩波古語辞典』は、ラシイ『接尾辞』の項目をたて、「推量の助動詞『らし』の転」とし、推量の助動詞ラシイ出自説をとっている。しかし、これを認めるには、いくつかの難点がある。

その第一は、平安時代中期以降、推量の助動詞ラシイの用いられる場が制約されているという点である。

推量の助動詞ラシイは、平安時代中期以降、和歌には用いられなかったけれども、散文にはほとんど用いられなくなり、用例数も少なくなるということが、松尾捨治郎氏<sup>注3</sup>をはじめ、先学諸氏によって指摘されている。

さらに、山口明穂氏<sup>注4</sup>は、藤原公任（九六六—一〇四一）の『新撰髓脳』や真観（一一〇九—一二七六）の『鏡河上』などの記述から、推量の助動詞ラシイが平安時代中期以降、古語として意識されていたこと、鎌倉時代には、助動詞ラシイが序などのあらたまった文章に適合するとうけとられていたことを指摘している。

また、抄物においても、管見のかぎり、ケラシ・ナラシはわずかに用いられているが、推量の助動詞ラシイの用例は、まだみいだしてない。

このように、推量の助動詞ラシイは、すでに、鎌倉・室町時代において、おそらく、口頭語として用いられていなかったであろうし、和歌や文章に用いられるにしても、格調の高い古語として意識され

ていたであろう。

以上のような使用状況にある推量の助動詞ラシイが、形容詞をつくる接尾辞に転じたということは考えにくいように思われる。

また、かりに、推量の助動詞ラシイと接尾辞ラシイとの間につながりがあるとしても、つぎのような問題点が残るであろう。

それは、言語主体の推量判断をあらわす助動詞ラシイが、属性の表現にかかわる接尾辞ラシイとなるのは、いかなる理由によるのか、また、どのような過程をとって接尾辞ラシイに転じたのかという点である。これに付随して、推量の助動詞ラシイは、活用語の終止形をうけるのに対して、接尾辞ラシイは体言につくことのも理由も明らかにされねばならない。さらに、属性をあらわしていたものが推量をあらわすようになる例としては、サウナやヤウナがあるけれども、これとは逆に、推量から属性をあらわすようになる例は認められない。

以上のような理由によって、推量の助動詞ラシイが接尾辞ラシイに転じたとする説は認めがたいと考える。

つぎに、B、すなわち、異分析の結果、接尾辞ラシイが成立したという見とおしを検討する。

このばあいの難点は、つぎのところにある。異分析によって新しい接尾辞が成立するためには、語の末尾がラシイでおわる、「……ラシイ」という語形の形容詞の異なり語がある程度存在することが前提となるであろう。しかし、「……ラシイ」という語形をもつ形容詞は、アタラシイ・メズラシイ・ホコラシイぐらいであって、異分析によってラシイという接尾辞が成立したとは考えにくい。

以上のように、A・Bふたつの見とおしにはそれぞれ難点がある

が、これらが接尾辞ラシイの成立に全く関与しなかったと言いきることもできないであろう。たとえば、推量の助動詞ラシイは、古典文学作品をつうじて、その存在を知ることができるし、接尾辞ラシイと語形が類似している点から接尾辞ラシイの成立になんらかの影響をおよぼしたのかもしれない。また、「……ラシイ」という語形をもつ形容詞も接尾辞ラシイ成立のための下地として作用したかもしれない。このような、いわば斜めの影響をおよぼした可能性はのころとしても、やはり、A・Bが直接に接尾辞ラシイの成立にかかわっているとは考えにくい。

すると、のころのはCの見とおしである。そこで、以下、その線にそって検討していく。

### 三

接尾辞ラシイによってつくられた形容詞（以下、「ラシイ型形容詞」とよぶ）の、抄物での用例数はそれほど多くない。小論の筆者が調査した範囲では、『史記桃源抄』（以下、「史」と略す）。に二二例、『玉塵抄』（以下、「玉」と略す）。に三例の、合計二五例であるが、異なり語数はさらにすくなく、アイソラシイ・実ラシイ・ツベラシイ・毒ラシイ・ナサケラシイ・バケラシイ・人ラシイの八語である。ひだりに、ラシイ型形容詞の用例をしめす。

② 遺婉トハ筆勢ノツツイヨ云タソ、ツイイト云テ、鬼々神ノヤウニテアイソモナイソ、美人ノウツクシウ、アイソラシイヤウナ（注<sup>5</sup>）

③ 白楽天寵愛シタ妓女二人アリ、小蛮ト云タソ……面白イ風流ナ柳ノホソくタワくトスル柳ノ枝ノ事ヲ、ヨイ声テアイソラ

シウ歌テ舞ウタ腰ノ細ウ長事、サナカラ柳ソ（玉 三五 470・14）

④ 処父カ至テ忠アリテ、国滅君死テ、臣節ヲ不忘ホトニ、天力石棺ヲ賜テ、氏族ヲ光華ニスルト云ハ、事カ実ラシウモナイソ（史 四 251・4）

⑤ 酷吏ハ、キツク、ツペラシク、人ニアタル事カ惨酷ナル者ヲ云ソ（史 一六 1・2）

⑥ 闇奉<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>惡<sup>ヲ</sup>用<sup>フ</sup> 矣トハ、温舒至惡ト云タリナントスルハ、ツヨク、アラウ、ツペラシイ者ヲ云ソ、悪五郎、悪源太ナント、日本ニ云様ニソ（史 一六 34・9）

⑦ 上ニ先ツツヨウ、ウラメシサウニ、云テ置テ、次ニ呂后ノ性カコワウテ、女ノ様ニモナイソ、カウテ毒ラシイ人ナルコトヲ、云タカ、文勢ノ面白<sup>ナリ</sup>処ソ（史 七 173・1）

⑧ 小時陰賊トハ、上ハナントナイ様テ、内心カ毒ラシウテ、人ヲ傷害スルソ（史 一七 94・6）

⑨ 秦人大失<sup>望</sup> 沛公ノウツクシク、ナサケラシク、アタラレタニ、カウアラウストコソ、思モヨラネトテソ（史 七 123・9）

⑩ 言行ニ尤悔カスクナケレハ、自然ト、禄力其中ニアルテコソアレ、始カラ禄ヲ干メハ、ナニカ、ハカラシイ事ハアラウソ（史 一一 124・6）

⑪ ヨイ智ノアル者ト云ヘトモ、人ニ物ヲ問イ談合モセヌモノハ、ハカラシウモナイソ（史 一二 448・1）

⑫ 鳥<sup>ノミリアツ</sup>身<sup>ノミリアツ</sup> 人言<sup>ノミリアツ</sup> ……全体ハ鳥テ、モノヲ云ハ、人ノ様ナハ、アマリハケラシイソ（史 四 248・16）

⑬ 老女ノワカイ時ニナマメイタナリスカタノアルヲ妖ト云タソ、

妖ハバケラシイヲ云ナリ(玉 四三 697・5)

⑭カ、ル時分ニ諸侯ニ人ラシイ人カアラハ、秦ニ天下ヲハ取ラレ  
マイモノヲソ(史 四 335・14)

⑮人コトニ随分理ヲモ心得ツヘシイ上テ、別シテヲレニ平生ヨウ

アタリタトモ、不思、ナントアラウトモ、ママヨト云テ、結局

マワルヒヤウシニハ、ワルサマニ、アタラウトスルハ、人ラシ

ウモナイ事ソ(史 一六 95・3)

これらのラシイ型形容詞の語基に注目して気づかれることは、ツ  
ペラシイをのぞいて、語基が名詞であるという点である。

ツペラシイは、例⑤・⑥からもわかるように、△惨酷な▽という  
意味である。第四節の例⑫にしめすように、ツペが反復され、それ  
に接尾辞シイがついたツペツペシイという形容詞もあり、ツペラシ  
イと同じ意味であるとみられるが、ツペだけが単独で用いられた例  
はみあたらない。このツペは、『源氏物語』などにみられるツペタ  
マシと関係があるのかもしれないが、今のところ、ツペが名詞なの  
か、あるいは、語根的なものなのかを決める手がかりはない。

以上、抄物におけるラシイ型形容詞の語基について調べたが、こ  
れらの例のみで、ラシイ型形容詞がどのような種類の語基をとるの  
かということ結論づけるわけにはいかない。そこで、『日葡辞書』  
および、寿岳章子氏の「形容詞の語彙の変遷」から、ラシイ型形容  
詞の例をおきない、ひだりにしめす。なお、ローマ字表記のものは、『日葡辞書』からの例である。

Begeraxij (ばげらじ)

Fitoraxij (ふたらし)

Fitoraxij fito

Mācotoraxij (マコトらし)

Varaberaxij (ワバベらし)

Vonagoraxij (ボンガゴらし)

Vonagoraxij fito

Votocoraxij (ボトコらし)

Votocoraxij vonna

Vōxeraxij (ボウゼらし)

Xiuoraxij (シウオらし)

ンキランニ

Afōraxij (アフオらし)

Airaxij (アイらし)

Cocorono airaxij fito

Aisōraxij (アイソらし)

Aisōraxij cotohauo caguru

Chōfōraxij (チウホウらし)

Guiōraxij (グイオらし)

Guiōraxū monouo yū fito

Jichiraxij (ジチらし)

Mono mōsu yōdaimo jichiraxij

Iintōraxij (イントウらし)

Iintōraxij fito

Xōneraxij (クネンらし)

Xōneraxij fito

Xuqeraxij (クセクらし)

Zoocuraxij (ゾウクらし)

正直ラシイ

Musaraxij (ムサラクシイ)

Xecaraxij (セカラクシイ)

Sattquberaxij (サツクベラクシイ)

Sattquberaxij tei

右の例のうち、Bageraxij から正直ラシイまでが名詞を語基としているものであるが、Musaraxij・Xecaraxij・Sattquberaxij の三語が例外となる。

Musaraxij のムサは、△汚ない▽という意味の、形容詞のムサイや副詞のムサムサトと関係づけることが可能であり、語根的なものと考えられる。Xecaraxij は、Xenuxenaxij (せわせわしい) の項目のところに、No Ximo se diz Xecaraxij (シモ九州地方ではセカラシイと言う) とあり、九州地方で用いられていた語らしいが、動詞のセクや副詞のセカセカトと関係づけられることから、セカも語根的なものであるとみられる。Sattquberaxij は、語基の種類が何であるのか不明である。

以上のように、ラシイ型形容詞の語基は、語根的なものや、語基の種類が不明なものが若干あるけれども、おおむね名詞であると言うことができる。

なお、江戸時代にはいると、カワイラシイのように、形容詞の語幹が語基となっているものや、アフレラシイのように、いわゆる形容動詞の語幹が語基となっているものも見られる、このように、語基の種類が多様化してくるのは、ラシイが接尾辞として確立したことをしめしているであろうが、接尾辞ラシイが成立した当初の語基は、おもに名詞であったとみられる。

#### 四

ラシイ型形容詞の語基は、原則として名詞であると認められることは、第三節に示したとおりである。

ところで、シク活用形容詞をつくる接尾辞で、名詞をも語基とするものは、接尾辞ラシイのほかに、シイ・ガマシイ・クラウシイなどがある。これらの接尾辞のうち、ガマシ(イ)は平安時代から、クラウシイは中世になってから、あらたに用いられるようになったものであるが、接尾辞ラシイとのつながりをもちそうなのは、語形の上で、接尾辞シイであると考えられる。

さて、名詞に接尾辞シイがついて派生した形容詞には、つぎのふたつの型がある。

I 名詞の反復形に接尾辞シイがついたもの

(例) カドカドシイ・コトコトシイ・モノモノシイ・美々シイ・雑々シイなど。

II 名詞に直接、接尾辞シイがついたもの

(例) オトナシイ・ハカシイ・マコトシイなど。

II は平安時代になってから用いられるようになったものである。また、I のばあいには、反復部分の音節数に制約があるとみられる。

つぎの表は、反復部分の音節数を、『史記桃源抄』からの用例によつてしめたものである。この表に示めされるとおり、二音節語の反復のばあいが39例とも多く、三音節以上の語が反復されることはすくないということがわかる。このような傾向は、平安時代のひら仮名文献においても同様である。

反復部	分の音節数	用例数
二音節	2	
四音節	39	
六音節	0	

をひだりにしめず。

⑮且<sup>ソノハ</sup>異<sup>ラシ</sup>何<sup>ハ</sup>知<sup>ラシ</sup>反

(史一五 40・2)

⑯Tquinii facebaexij cotoua nacatta

⑰言<sup>シ</sup>舞<sup>ハ</sup>ノ<sup>ハ</sup>徳<sup>カ</sup>イ<sup>カ</sup>メ<sup>イ</sup>ホ<sup>ト</sup>ニ、自然ニ<sup>ニ</sup>陶<sup>器</sup>カ<sup>ユ</sup>ミ<sup>モ</sup>セ<sup>ス</sup>、イ<sup>シ</sup>マ

モ<sup>ナ</sup>イ<sup>ソ</sup>、或<sup>チ</sup>云<sup>フ</sup>只<sup>ニ</sup>ヨ<sup>リ</sup>テ、カ<sup>ウ</sup>ア<sup>ル</sup>ト<sup>云</sup>モ<sup>ヨ</sup>ケ<sup>レ</sup>ト<sup>モ</sup>、ア

マリ<sup>ハ</sup>ケ<sup>ク</sup>シ<sup>イ</sup>ホ<sup>ト</sup>ニ、……(史三 72・9)

⑱Bagebaexij i. Bageraxij

⑲目<sup>流</sup>涕<sup>以</sup>横<sup>波</sup>……波<sup>ヲ</sup>横<sup>ウ</sup>ハ<sup>コ</sup>ト<sup>ク</sup>シ<sup>イ</sup>ン 唐<sup>人</sup>ハ

詩<sup>句</sup>ニ<sup>ゲ</sup>ウ<sup>ク</sup>シ<sup>ウ</sup>作<sup>ソ</sup>(玉 四〇 376・5)

例⑮・⑰のハカバカシイは例⑩・⑪のハカラシイに対応し、例

⑬・⑭のバケバケシイは例⑫・⑬のバケラシイに対応し、例⑳のゲ

ウゲウシイは『日葡辞書』の Guiraxij に対応している。

また、語基が名詞以外のものであるばあいにも、例㉑のツベツベ

シイと例⑤・⑥のツベラシイといった対応が見られる。

㉑慘<sup>敵</sup>ハ、ツ<sup>ヘ</sup>シ<sup>イ</sup>ソ、ナ<sup>サ</sup>ケ<sup>ナ</sup>ウ<sup>人</sup>ニ<sup>ツ</sup>ヘ<sup>ク</sup>シ<sup>ウ</sup>ア<sup>ル</sup>ソ

(史一一 50・15)

つまり、

反復形<sup>ニ</sup>シイ——非反復形<sup>ニ</sup>ラシイ

ところで、注目されることは、名詞の反復形に接尾辞シイがついて派生した形容詞のなかに、ラシイ型形容詞の語基と共通の名詞が反復されているものがあるという点である。その例

という対応関係がなりたつと考えられるのである。第一節にしめした例①の愛ラシクが愛々シクという異文をもつことも、みぎの対応関係がなりたつことの、ひとつの裏づけとなるであろう。

そしてまた、愛ラシクと愛々シクとは、意味のちがいはほとんどないということもわかれる。右にあげた、例⑮⑱のハカバカシイ・バケバケシイ・ゲウゲウシイ・ツベツベシイと、それに対応するハカラシイ・バケラシイ・ゲウラシイ・ツベラシイとは、たとえば、語感の強弱というような、ニュアンスの微妙な差はあるかもしれないけれども、意味・用法のきわだったちがいは認められないようである。

## 五

第四節でのべたように、形容詞において、反復形<sup>ニ</sup>シイと非反復形<sup>ニ</sup>ラシイとの対応が見られるわけであるが、ここで思いあわせられるのは、情態副詞のなかの、擬音擬態の副詞のばあいである。

柳田征司氏の調査によると、抄物において、反復形をとる擬音擬態の副詞は、全用例(六四〇例)中の約三三%をしめるといふ。

これに次いでおおいのが、ハラリトやウルラトのような、「〜ラト」・「〜ラト」という語形の副詞である。そこで、注目されるのは、「〜ラト」という語形の副詞のなかに、反復形をとる擬音擬態の副詞と対応しているものがあることである。その例をひだりにしめす。

②江<sup>ヤ</sup>海<sup>ノ</sup>水<sup>ニ</sup>ハ<sup>必</sup>珠<sup>ガ</sup>ア<sup>ル</sup>ソ、珠<sup>ガ</sup>ア<sup>レ</sup>ハ、水<sup>ガ</sup>ス<sup>ン</sup>デ<sup>明</sup>ニ<sup>ウ</sup>

ル<sup>ノ</sup>ト<sup>テ</sup>リ<sup>カ</sup>、ヤ<sup>ク</sup>ソ、玉<sup>ニ</sup>山<sup>ノ</sup>木<sup>潤</sup>ト、ツイ<sup>ニ</sup>カ<sup>イ</sup>タ<sup>ソ</sup>、

山<sup>モ</sup>玉<sup>ヲ</sup>モ<sup>テ</sup>ハ、草<sup>木</sup>ノ<sup>色</sup>モ<sup>ウ</sup>ル<sup>ラ</sup>ト<sup>ア</sup>ル<sup>ツ</sup>(玉 一五 823・

10)

⑳ 淵ニハ必珠カ生スルソ、ソノ近所ノ山ヤ岸ハウルラトシテカレ

ヌソ、草木ノ色モウルくトスルソ (玉 二〇 666・4)

㉑ 溫柔——ハ、ヌクくヤワくトシタ処ソ (四河入海 一四之

三 506・12)

㉒ 我カ只対雪物ヲ飽ホトクウテ、ヌクラトシタハ、無風騒ナル事

ソ  
〔対雪不堪令飽憂〕

(四河 二〇之一 231・12)

㉓ サテ節推カナリハ何トアルソト云へハ、窈然トシテ、フカく

トシテ、ウカくトナイ人ソ、節推ハ官ノ名ソ (四河 二一之

二 773・7)

㉔ ……季常坐禪シテ拄杖ヲ拈スルモ、妻ニシカラレテウカラトシ

テ有ソ

〔拄杖落手心茫然〕

(四河 一六之二 252・7)

㉕ ……胸カスキスキトスルソ……茶ヲノメハ、心カスキスキトス

ルソ (山谷抄)

㉖ サテ、貧女ハ、白粉朱砂ナントヲ買テ散事ハヨセヌ程ニ、セメ

テ、面ヲモスキラト洗い、髪ヲモヨウ洗テ梳テ、サハくトナ

ヲレハ、人ニモ似ルソ (四河 三之二 259・5)

㉗ 今— 坡言ハ、我レ儺耳ノ辺テ心ノムサくトシタヲ、今日冠

ヲトリノケテ新沐シテ、ス、くトアル時分ニ…… (四河 二

二之四 425・17)

㉘ 青— 坡言ハ、子由ト別テアル心テ、青山ヲ見ルモ、モウ

くトシテムサラトアルソ (四河 二二之三 345・10)

例㉒・㉓のウルウルトとウルラトは、どちらもうるおいのある状

態をあらわしているが、「草木ノ色」について、ウルウルト、ウル

ラトとが用いられていることから明らかなように、両者に意味のち

がいは認められない。

例㉔・㉕のヌクヌクト—ヌクラトは暖かいようすをあらわし、

例㉖・㉗のウカウカト—ウカラトは茫然としたありさまをあらわ

し、例㉘・㉙のスキスキト—スキラトはすっきりとしているよう

すをあらわし、例㉚・㉛のムサムサト—ムサラトは心の鬱屈して

いるようすをあらわしている。

このように、擬音擬態の副詞のばあいにも、

反復形||ト—非反復形||ラ||ト

という対応が見られる。そして、この両者に意味のきわだったちが

いを明確に認めることはむずかしい。

六

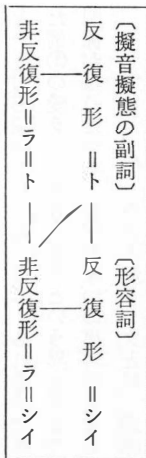
第四節と第五節とから、つぎのことが導かれる。

形容詞における、反復形||シイと非反復形||ラ||シイとの関係

は、擬音擬態の副詞における、反復形||トと非反復形||ラ||ト

との関係に対応する。

みぎの関係を図示すると、つぎのようになる。



まず、横の関係では、擬音擬態の副詞において、反復形Ⅱトと非反復形Ⅱラトとが対応している。一方、形容詞においても、擬音擬態の副詞のばあいと同様に、反復形Ⅱシイと非反復形Ⅱラシイとの対応が見られる。

つぎに、縦の関係では、擬音擬態の副詞の、反復形Ⅱトにたいして、形容詞の、反復形Ⅱシイが対応しており、擬音擬態の副詞の、非反復形Ⅱラトにたいして、形容詞の、非反復形Ⅱラシイが対応している。

また、擬音擬態の副詞の、反復形Ⅱトと、形容詞の、非反復形Ⅱラシイとが対応している例としては、例⑳にせしめずサムサトと、ムサラシイといったものがある。

㉔而土木——土ヤ木ノヤウニシテ、我身ヲ、カサラヌソ、身ヲムサムサト、モツソ、湯ヲアヒツナトモセヌソ（蒙求抄 二 163・10）

以上の、擬音擬態の副詞と形容詞との形態上での対応関係から、つぎのことが考えられる。

まず、擬音擬態の副詞における横の対応関係のばあい、トをのぞいた、非反復形Ⅱラの部分は反復形に相当するものであるとみなすことができる。すると、形容詞のばあいも、反復形に相当するものは、シイをのぞいた、非反復形Ⅱラの部分であると認められる。そこで、左記のような推定がなりたつ。

非反復形に接尾辞ラシイがついたものは、非反復形にラがつき、さらに、形容詞をつくる接尾辞シイがついた、非反復形Ⅱラシイであった。

このように推定したばあい、つぎに問題となるのは、ラのはたら

きである。

さきへのべたように、非反復形Ⅱラが反復形に相当するものであるとすると、非反復形は反復形とおなじはたらきをしているはずである。反復形については、情態言の形成にかかわっているとの指摘が阪倉篤義氏によってなされている。すると、非反復形Ⅱラも、反復形と同様に、情態言を形成するものであると考えられる。そして、情態言を形成するはたらきは、ラにあるとみられる。

## 七

反復形と非反復形に情態言をつくる接尾辞がついたものとの対応は、擬音擬態の副詞や形容詞のばあいだけにのみみられるわけでなく、つぎのようなものも、その類例となるであろう。

ウラウラト——ウララ、カナリ  
ツヤツヤト——ツヤヤ、カナリ  
シツシツト——シツカ、カナリ  
ハラハラト——ハラリト

このような対応は、中世のみならず、上代以来みられるものであり、反復形と非反復形Ⅱラとの対応関係によって、接尾辞ラシイが成立する可能性は、どの時期にもあったといえよう。

しかし、接尾辞ラシイが名詞につくという点を見ると、その成立時期は平安時代以前にはさかのぼらないと思われる。

第四節でのべたように、名詞を語基として形容詞を派生するには、名詞の反復形Ⅱシイと名詞Ⅱシイとのふたつの型があるわけであるが、名詞の反復形Ⅱシイのほうは、反復部分の音節数に制約があり、三音節以上の名詞が反復されることはさけられる傾向にあっ

た。名詞 $\parallel$ シイが平安時代になって用いられるようになったのは、音節数の制約のために反復形をとりにくい語、すなわち、三音節以上の名詞から形容詞を派生させるためであったのである。これは、平安時代の、名詞を語基とするシク活用形容詞に、オホヤケシ・マコトシ・ラムナシなどのように、三音節以上の名詞が語基となっているものがおおいことからもうかがえる。

このような、名詞 $\parallel$ シイというむすびつきができたうえで、名詞のもつ屬性をあらわす面をより明確化するために、情態言の形成にかかわるラをくわえて、名詞 $\parallel$ ラ $\parallel$ シイが成立したのではなからうか。したがって、名詞につく接尾辞ラシイの成立は、名詞 $\parallel$ シイが平安時代になってから用いられたものであることを考えると、すくなくとも、平安時代以降——おそらくは、中世になってから——ということになる。

ところで、一五—一六世紀の、「 $\sim$ ラト」という語形をもつ擬音擬態の副詞は、第五節に示した例からもわかるように、この時期に生きて用いられていたものであって、前代のものが化石的に残ったといったものではない。「 $\sim$ ラト」という語形の擬音擬態の副詞は、そのほかに、つぎのようなものがある。

○バサラト・フクラト・ツクラト・ムクラトなど<sup>注12</sup>

○ツツラト・ボボラト

○オンボラト・ソソボラト・ヌンメラトなど

○フツクラト・ムツタラト・ユツクラトなど

A $\sim$ Bラト・A $\sim$ Bラトといった、一定の類型によってつくられたとみられる語もあるが、これらも前代の語の化石的残存でないことは明白であろう。

ただし、これらの語のなかには、ソソボラトやユツクラトのように、「 $\sim$ リト」という語形のものがあわせて用いられているものもある。森田雅子氏の調査によると、「 $\sim$ リト」という語形は、平安時代からみられ、現代にまで至っているものであり、一方、「 $\sim$ ラト」のほうは、奈良時代から室町時代まで見られるが、江戸時代には見られなくなるという。すると、一五—一六世紀ころは、「 $\sim$ ラト」が「 $\sim$ リト」にとつてかわられつつあった時期であるとみられる。

とはいえ、この時期においても、ラはまだ生きて用いられていたし、情態言の形成にかかわる力ももっていたと認められる。

## 八

以上の考察により、接尾辞ラシイは、非反復形 $\parallel$ ラ $\parallel$ シイから成立し、ラは情態言の形成にかかわるものであるとの結論を得た。

### 【調査資料】

史記桃源抄 亀井孝・水沢利忠著『史記桃源抄の研究』（日本学術振興会）による。

玉塵抄 中田祝夫編『抄物大系別刊・玉塵抄』（勉誠社）による。

調査範囲は、全五冊中一九冊（一一—二〇・三二・三四—三六・三八—四二の各冊）

四河入海 中田祝夫編『抄物大系別刊・四河入海』（勉誠社）による。

蒙求抄 中田祝夫編『抄物大系・蒙求抄』による。

なお、『四河入海』・『蒙求抄』は、岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成・索引篇』（清文堂）を利用した。

沙石集 『日本古典文学大系 85・沙石集』(岩波書店)による。

注1 「複合形容詞の構成と表現」『表現研究』6 (昭和42年9月)

注2 異分析とは、たとえば、アタラシイのばあいを例にとると、アタラ・シイという語構成をとるものが、アタ・ラシイと分析

されることをさす。

注3 『助動詞の研究』(文学社・昭和18年2月) 七一頁～七六頁

注4 「中世文語における助動詞『らし』とその周辺の語」『中世国語における文語の研究』所収(明治書院・昭和51年8月)

注5 引用の所在は、書名・冊数・複製本の頁数・行数の順にしめす。

注6 このひしりもたけたかやかに まふしつへたましくて あららかにおとろくしくしたらにをよむを……(柏木『源氏物語大成』による)

注7 「形容詞の語彙的変遷——中古から中世へ——」『国語学』22 (昭和30年9月)

注8 竹内美智子 「源氏物語の語構成について——その一——」『共立女子短期大学紀要』(昭和41年12月)

注9 「抄物に見える擬声擬態の副詞」『愛媛大学教育学部紀要・人文社会科学』(昭和47年3月)

注10 寿岳章子 「抄物の擬声・擬態語彙」『京都府立大学国語国文学会誌』1 (昭和34年4月)による。

注11 『語構成の研究』(角川書店・昭和41年3月) 三四八頁

注12 ウカラト・フクラトのように、A Bラトと表記されているものには、『史記桃源抄』にウツカラトとウカラトとが近接して

用いられている(一八 185頁)というようなことがあり、A ッ Bラトと発音されていたのではないかという疑いがのこる。し

かし、A BラトはA ッ Bラトと発音されたという確証もないので、表記どおり、A Bラトと発音されていたものとしておく。

注13 「語音結合の型より見たる擬音語・擬容語」『国語と国文学』(昭和28年1月)

〔付記〕

本稿は、一九八〇年国語学会春季大会において発表したものをまとめたものです。その際、御教示をいただきました先生方にあつく御礼申しあげます。また、稿をなすにあたり、小松英雄先生、北原保雄先生の御指導をたまりました。ここに感謝の意を表します。

——筑波大学大学院生——